

久田恵氏講演要旨

私は1947年生まれの団塊世代です。学生運動の激しい時代に、末娘には穏やかに暮らしてほしいという両親の勧めで、上智大学の社会学科に入学し、社会福祉学を専攻しました。

しかし上智にも学生運動の嵐が吹き荒れ、大学はロックアウトされました。「大学が学生を拒絶するって、どういう事？」と怒りに燃え中退し、更に自分の人生を素手で切り開いていこうと家出までしました。両親は慌てて、大学の私の恩師に相談しましたが、「追いかけてはいけません」と言われました。父も覚悟を決めて、「お前は人生の修行に出たと思う。存分に生きろ」と、手紙を友人に託しました。母は「親の気持ちもわかってほしい。連絡先だけは教えて」と書いてきました。

そこで私は早めの自立を果たし、それが想定外の人生の始まりとなりました。

ちょうど高度経済成長の時代で、労働者と連帯しなければと、ソニーの下請けのトランジスター工場で働き始めました。ベルトコンベヤーでハンダ付けをしましたが、上手になるとコンベヤーがどんどん速くなって、まるでチャップリンの映画のよう。友達もできず、孤独でした。新聞の求人欄で人形劇団員の募集が目にとまったので、楽しそうだな、と今度はこの研究生になり、仕事を教わりながら、共同生活をしました。学生運動挫折派の吹き溜まりのような所になっていて、全国からたくさんの元活動家が集まっていました。

それ以降、様々な仕事に就き、転職を繰り返しました。

ベビーシッター兼家庭教師をしていた時は、その子の夕飯も作り、ついでに働いている母親の分まで作りました。とても感謝されて、後々彼女からずいぶん助けられました。人には親切にするものだという事と、自分のアイデアでお金を稼ぐことを学びました。

正規に勤めたことが一度もないので年金がほとんどないのです。

それだけは失敗したと思います。

周りを見ていると、年金制度は凄いいと思います。なにしろ90歳を超えてもお金が入ってくるのですから。私の方はいまだに働かなくてはなりません。8年かけて『ニッポン貧困最前線』を書いたりしました。大学は中退しましたが、いわばそれは私の卒論で、上智時代の友達がとても褒めてくれて、大学の先生になった人たちが教科書に使ってくれました。

結婚制度には抵抗があったので、30代でシングルマザーになりました。博報堂の資料室で働き、アパートを借り子どもを保育園に預けて親子二人の生活をしていました。でも子どもが早々登園拒否になりました。それで、仕事も大変で落ち込んでいたら、友達が「もうサーカスにでも行くしかないじゃない」などと言います。

「そうだ、サーカスに行こう！」とひらめいて、早速、本屋に行ってサーカスの本を探しました。サーカスの写真集を見つけ、その写真家に電話をしたら「サーカスで子供を育てたら、素晴らしいだろうな」と言うではありませんか。サーカスの方も大歓迎です。息子に「ぞ

うさんと暮らすの、どう思う？」と聞いたら、「行く、行く！」と大喜び。炊事係として幸せな日々を送りました。その体験を「サーカス村裏通り」という本にして、ノンフィクション作家としてデビューすることにもなりました。

70歳過ぎて、那須町のサ高住（サービス付き高齢者住宅）に住むようになりましたが、昔サーカスで一緒だった人から突然メールをもらいました。なんと隣にある特養ホームで介護士さんをしていたのです。日本のサーカスは衰退して、団員は日本全国に散らばっていますが、その人たちのラインネットワークが、出来ていきました。

今では、私と同じノンフィクションの作家になった息子もそのメンバーになり、「僕が5歳の時に会ったサーカスの人たち」という本を書くべく、目下、取材をしています。

実は、この息子が小学校に上がるころ、転勤族だった両親が藤沢に家建てました。「孫の面倒をみるから、家に戻ってきたら？」と、母が手を差し伸べてくれ、私は38歳で子連れの出戻り娘となりました。ところが、一年後、その母が突然倒れたのです。私が何とか物書きで食べられるようになっていた頃でした。父と二人で母の介護を12年して、その後父の介護と、計20年の介護の日々を費やし、気がついたら60歳になっていました。

息子が結婚し、次は孫の子育て支援に駆り出され、ついに70歳になりました。

さすがに、後はもう自分で好き勝手に生きると、衝動的に那須のサ高住に引っ越したのです。息子が「お母さんは勝手だ」と文句を言いました。三番目の孫も生まれて大変そうでしたが、私は帰らないことにしました。男女平等と言うけれど、女は子育てや親の介護に縛られて、なかなか自分自身の為生きられません。気がついたら70歳になっていた！それが私たちの世代の女の人生だと実感しました。

こんな人生でどうやってポジティブな考えを持ってこられたのか？

人生は困難が前提だと思うこと。そして、なにかに煮詰まって身動きができなくなったら、バーンと飛ぶ。飛んで、ステージを変えてそこからまた歩き出す。私はそういう主義です。

そして、時々知り合った人々がジグソーパズルのピースのように散らばっていたのが、晩年になって又合わさってきて出会い直しをしています。いろんな人との出会いや助け合いがあってこそ生きてきたのだと思います。

私は、20年間介護をして家から離れられず自由ではありませんでした。「自由になりたい。どこか違う所に行きたい」と絶えず思っていました。では自由って何？どこかに行くことが自由？木はそこにじっとしているけど、花を咲かせ、葉を茂らせ、鳥や人々が集い、実りある物をもたらしてくれる。「木のようなどっしりとした自由を持たなければ」と悟り、「ここに来て、なおかつ自由」という考えを獲得した生き方をしようと思うようになりました。

高齢者コミュニティはけっこう出入りが激しいのです。皆、晩年になっても落ち着くべき幸せな場所を探しています。でもそういう所はないのです。自分の意志で今いる所をバラ色にするしかありません。

そんなわけで、私は近くに2000平方メートルの原っぱを借りて、入居している人たちと「原っぱプロジェクト」を立ち上げ、ガーデンハウスや野外の人形劇場を作っています。

サ高住は全国からあらゆる職業の人たちが「どういうわけか集まっちゃった」、まさに奇跡の出会いの場です。皆、苦労重ねてここにたどり着いたのです。個性の強い人達ばかりですが、そういう人たちがお互いを肯定し合い、認め合い、あえて目標も作らずに、自由に自分たちで決めて、晩年をサ高住で共に暮らしています。

今は、それが楽しいです。